

家庭の教育戦略としてのおこづかい

——全国小中学生データの計量分析——

比較教育社会学コース	鶴 蘭 佳菜子
比較教育社会学コース	山 口 泰 史
比較教育社会学コース	鈴 木 翔
比較教育社会学コース	武 田 真梨子
比較教育社会学コース	須 藤 康 介

“Okozukai” (an allowance) as a Family Education Strategy

——Empirical Analysis of Elementary/ Junior High School Students in Japan——

Kanako TSURUZONO, Yasufumi YAMAGUCHI, Sho SUZUKI,
Mariko TAKEDA and Kosuke SUDO

The purpose of our study is to examine what is the determining factor of the amount of “*okozukai*” (an allowance) and how it influences elementary/ junior high school students’ consciousness and behavior.

As a result of our analyses, we got the following findings. First, parents who are concerned about their children’s education are likely to reduce the amount of “*okozukai*”. Second, the amount of “*okozukai*” have effects on children’s behavior but it depends on whether parents take interest in education of children. “*Okozukai*” as a family education strategy doesn’t necessarily have an equal influence on every child.

目 次

1. 問題設定
2. 先行研究の検討
3. 使用データと分析の構成
 - A. 使用データ
 - B. 分析の構成
 - C. 変数の設定
4. 分析
 - A. おこづかい額の基礎分布
 - B. おこづかい額の規定要因
 - C. おこづかいが小中学生に与える影響
5. 結論と考察

1. 問題設定

本稿の目的は、小中学生のおこづかいの金額の規定要因と、おこづかいが小中学生に与える影響を明らかにすることである。

子どもにいくらのおこづかいを与えるかは、とくに小中学生の子どもをもつ親にとって関心の高いトピッ

クの1つである。『プレジデントファミリー』や『日経キッズプラス』など2000年代後半に刊行され部数を伸ばしてきた教育雑誌を筆頭に、数々の雑誌媒体で子どもに与えるおこづかいの金額をめぐる特集が組まれている。『AERA with Kids』の「隣の家は どうして？ 4歳から10歳までの子どもを持つお父さんお母さん500人に大アンケート——おこづかい 何歳からいくらあげればいい？」(2006年3月15日号)や、女性誌『エッセ』の「家庭の『お金教育』はとても大切ですよ 子どもに教えるお金のこと——おこづかいのあげ方、おこづかいの管理」(2009年5月号)などがその一例である。これらの記事に目を通すと、おこづかいを通して、子どもにお金の扱い方だけではなく計画性や自己管理能力をも身につけさせようとする親の意図を読み取ることができる。もはやおこづかいは単に親から子どもへの金銭の授受だけでなく、教育戦略の一環として重要なツールに位置づけられていることがわかる。

しかし、おこづかいをめぐる議論はこれらの雑誌記事において活発になされているものの、実証的な研究

はほとんど進んでいないのが現状である。海外の研究では、Abramovitch et al. (1991) や Furnham (1999), Ridge (2002=2010) らが子どもの経済的社会的化及びおこづかいに関する研究の重要性について指摘しているが、彼らの研究もまた理念的検討にとどまっている。

小中学生のおこづかいの金額の規定要因を実証的に分析することは、いまだ実証的な裏付けがなされないまま議論が先行する、子どものおこづかいに対して一定の示唆を与えうるだろう。さらに、おこづかいの金額の規定要因のみならず、おこづかいが子どもに与える効果を明らかにすることは、子どもをもつ親にとっても有用な知見を提供しうると考えられる。

というのも、1990年代半ば以降から、政策的・社会的に家庭教育への関心が非常に高まっており、既に様々な配慮や努力をおこなっている母親たちがさらなる負担を強いられ、葛藤を余儀なくされているという指摘がある(本田2008)。すなわち、家庭教育の重要性が強調され、加熱されている現代では、親たちは家庭教育への葛藤を抱きながらも、巷にあふれる多くの教育法から我が子のために適切な教育戦略を取捨選択しているということになる。しかし他方では、時間的・経済的・心理的な余裕のなさから子どものしつけや教育に関して戦略的にふるまえない家庭も存在しているであろうし、日本社会の格差化や貧困化の進行といった現状を鑑みるに、それらの家庭はむしろ増加しているおそれすらある。そのような家庭教育をめぐる錯綜状態への対処に役立てるためにも、家庭の教育戦略がもっている効果を的確にとらえることが重要であると考えられる。

次章でも触れるが、おこづかいに関する研究蓄積は乏しく、おこづかいの金額が子どもに与える影響に関するほとんどの分析では、おこづかいとその他の変数の関係を1:1のものとして示しているにすぎない。教育は、あらゆる要因が重なることによって、相乗効果を創出することが考えられる。おこづかいの効果を考えるのであれば、家庭のその他の教育戦略との交互作用にも注目する必要があるはずである。

2. 先行研究の検討

前章の問題関心のもと、本章では小中学生のおこづかいについての先行研究を整理するが、すでに述べたように、教育戦略としてのおこづかいを扱った社会学的研究はほとんど存在しない。とはいえ、おこづかい

が小中学生自身にとってどのようなものであり、どのように用いられているのかについては、教育実践や発達心理学の分野でいくつか研究がなされている。これらの研究は、本稿の分析を深めるための一助となりうるだろう。ここでは、「小学生」「中学生」「親」の3つの観点から分析されてきたおこづかい研究の知見の概要と、その整理を通じてみてきた先行研究の課題点について述べていきたい。

小学生段階の子どもの場合、おこづかいは基本的に親の規範を内面化して使用されているといわれている(山本1992)。すなわち、おこづかいの使い方や貯金の勧めなどの親からの口出しに対して、子どもは従順にふるまう傾向が強いということである。しかし、おこづかいのような「金銭」に対しては親の規範に基づいて行動するものの、おもちゃなどの「モノ」全般の処分権に対しては、子どもはすでに小学生段階において自分のものという認識をもつことが指摘されている(山本1992)。

その小学生が中学生に成長すると、小学生時の親の規範を内面化した節約的な金銭感覚が次第に薄れ、浪費傾向になるという報告がある(竹尾ほか2009)。さらに、奥村ほか(1989)や竹尾ほか(2004)は、学年が上昇するにつれて、友だちとのコミュニケーションや同調のためにおこづかいを使用するようになると指摘している。

一方、子どもにおこづかいを与える親の取り組みについても、先行研究において言及されている。奥村ほか(1989)は、親子間でおこづかいの使い道を決めていないケースの多さを指摘し、また、田結庄ほか(1992)は、おこづかい帳を記帳するように指導している親の少なさを取り上げ、おこづかいに関する親の指導は「放任傾向」であるとし警鐘を鳴らしている。

以上の知見をまとめると、小学生段階の子どもには親の規範が強く影響しているが、それが中学生へと学校段階が上昇するにつれ、親の監督から離れ、浪費的におこづかいを使う傾向が強くなると解釈することができる。

しかし、これらの先行研究には少なくとも2つの課題がある。第1に、これまでの研究はおこづかいの使い方の実態を描き出すにとどまり、そもそもおこづかいの金額が何によって規定されているのかに対して、精緻な分析がなされてこなかった。

また、先の問題関心と照らし合わせ、おこづかいが教育戦略の1つのツールになっている可能性を視野に入れる場合、おこづかいの額が親の教育に対する価値

親の影響を受けているのかについても検討する必要がある。おこづかいの金額設定の規定要因を探ることは、子どもを取り巻くおこづかいの世界を捉える上で、非常に重要となるだろう。

第2に、おこづかいが小中学生に及ぼす影響を分析する上で、子どもの金銭感覚以外の側面に関する分析が十分になされていない。前章で触れたように、親はおこづかいを通じて子どもに金銭感覚を身につけさせるだけでなく、より広範な自己管理能力を身につけさせることを意図している可能性があるが、そのような意図に沿った効果が子どもに表れているか否かを検証した研究は管見の限り存在しない。家庭の教育戦略としてのおこづかいの意味を把握するためにも、おこづかいと子どもの意識・行動の関連を多角的に把握する必要がある。

以上の2点を踏まえて、本稿の分析課題を設定する。1つ目は「小中学生のおこづかいの金額の規定要因は何か」。2つ目は「おこづかいが小中学生に与える影響はいかなるものか」である。本稿では、これら2つの課題の検証を通じて、小中学生のおこづかいの実態を精緻に描き出したい。

3. 使用データと分析の構成

A. 使用データ

分析で使用するデータは、ベネッセコーポレーションが、2004年11月から12月にかけて、小学4年生から高校2年生を対象に実施した「第1回子ども生活実態基本調査」である。この調査では、日本全国の市区町村の人口規模および人口密度を考慮し、3地域区分を設定した有意抽出法で標本抽出がなされており、最終的な有効回答数は14841人である。なお、調査の概要は、Benesse教育研究開発センター（2005）に掲載されている。

この調査データでは、おこづかいの金額のほか、親や友だちといった周りの人々との関係、学習に対する姿勢や目的など、子どもたちの生活全般に関する意識や実態について幅広い質問項目が掲げられており、子どものおこづかいの規定要因や、おこづかい額が影響を与えると考えられる項目が多岐にわたって含まれている。また、小学校、中学校および高校それぞれに調査を行っているため、子どもの発達段階における相違点に着目することができる。これらの点において、本データは本稿の問題関心に応えるのに適合的であると考えられる¹⁾。

なお、本稿では小中学生に限定して分析をおこなう。高校生になるとアルバイトを始める生徒が現れ、労働の対価として金銭を得る機会が混在してしまうからである。したがって、実際の分析対象は小学生4240人、中学生4550人となる。

B. 分析の構成

本節では、次章における分析構成を説明する。まず、4章A節では、おこづかいの金額の基礎分布を確認する。分析は小学生と中学生を区別しておこなう。以下、すべての分析において同様である。

B節では、本稿の1つ目の課題である、小中学生のおこづかいの金額の規定要因について分析する。その際に使用する独立変数は、性別・学年・家庭の教育方針の3つである。家庭の教育方針の指標としては様々なものが考えられるが、本稿では「(小さい頃に)親に本を読んでもらった」と「(親が)勉強を教えてくれる」と「(親は)悪いことをしたときにしかってくれる」を用いる。仮説としては、これらがなされている家庭、つまり、教育熱心でしつけを重視する家庭では、消費文化への傾倒を憂慮する立場から、おこづかいの金額が比較的少なめに設定されていると予測する。

続くC節では、おこづかいが小中学生に与える影響という、本稿の2つ目の課題を検証する。前章で述べた先行研究では、おこづかいが子どもに与える影響として金銭感覚のみが注目されていたが、本稿ではそれに留まらず、より広範な自己管理能力に与える影響まで分析の射程に入れる。

具体的には、おこづかいが影響を与える従属変数として、以下の3つを取り上げる。第1は、「(お金を)むだづかいをしないようにしている」である。これはおこづかいの金額と直接的にむすびつく金銭感覚として、先行研究でも注目されてきたものである。第2は、「自分のことは、できるだけ自分でするようにしている」であり、第3は、「きまりやルールをきちんと守るほうだ」である。前述のように、おこづかいが金銭感覚を身につけさせるだけでなく、より広範な自己管理能力を身につけさせることにもつながるという指摘がある。これを検証するための変数である。

なお、分析に際しては、おこづかいが単独として、これらの意識・行動に与える影響を分析するだけでなく、おこづかいと家庭の教育方針の交互作用にも着目する。つまり、たとえば「(親は)悪いことをしたときにしかってくれる」というような家庭でおこづかい

が与えられた場合と、そうでない家庭でおこづかいが与えられた場合で、その効果が異なるのではないかとすることも検証する。仮説としては、しつづけを重視する家庭では、おこづかいが自己管理能力の育成につながりやすいが、しつづけを重視しない家庭においては、おこづかいが自己管理能力の育成につながらず、単純に消費行動に使われるだけなのではないかと考えられる。

C. 変数の設定

使用する変数の一覧を表 1 に、その記述統計量を表 2 に示す。なお、おこづかいの用途を分析のメインに扱っていないのは、おこづかいの用途に関する質問項目が、「たくさん使うものを 3 つまで選んで、番号に○をつけてください」というものであり、3 つという制約によって、実際に使われているのに○をつけられていない項目が存在するためである。また、4 つ以上の項目に○をつけている回答者もあり、変数の信頼性に疑問が残るため、本稿では使用変数から除外する。

4. 分析

A. おこづかい額の基礎分布

ここでは、小中学生の毎月のおこづかい額の基本的な分布を確認する。図 1 は小学生のおこづかい額の分布である。小学生では 1～500 円と 501～1000 円を合わ

せて、全体の約 65% を占めている。次の図 2 は、中学生についておこづかい額の分布を示したものである。これを見ると、中学生の 7 割近くが毎月 1000 円以上おこづかいをもらっており、小学生に比べて金額がより高くなっていることがわかる。

B. おこづかい額の規定要因

この節では、本稿の 1 つ目の課題である「おこづかいの金額の規定要因」について検討する。小学生に関して、性別・学年・家庭の教育方針とおこづかい額の関係をクロス集計で示したものが表 3～7 である。表 3 より、性別とおこづかい額は関連しているものの、分布に大きな差があるわけではないことがわかる。また、表 4 より、学年が上昇するとおこづかいの金額が上昇していることも見てとれる。そして、表 5 と表 6 より、教育熱心な家庭のほうが子どものおこづかい額を低く設定していることがわかる。ただし、表 7 より、同様に家庭の教育熱心さの指標の 1 つである「悪いことをしたときにしかってくれる」とおこづかいの金額に、統計的に有意な関連がないことには、注意が必要である²⁾。

同様に、中学生に関して分析した結果が表 8～12 である。表 8 より、中学生になると、女子のほうが男子よりもおこづかいをもらっている傾向が明確になっている。女子が流行の服などのやや高額なものを購入するようになることが、この理由と考えられる。また、

表 1 使用する変数の一覧

おこづかい額	1ヶ月あたりのおこづかい額で表す。クロス集計では、小学生は「0円」「1～500円」「501～1000円」「1001円以上」に区分し、中学生は「0～1000円」「1001～2000円」「2001～3000円」「3001円以上」に区分する。ロジスティック回帰分析では、千円単位の連続変数として用いる。月10万円以上のケースは外れ値として、分析から除外した。
女子ダミー	女子=1, 男子=0
大都市ダミー	大都市に住んでいる=1, 住んでいない=0
中都市ダミー	中都市に住んでいる=1, 住んでいない=0
小5/中2ダミー	小学校5年生/中学2年生=1, それ以外の学年=0
小6/中3ダミー	小学校6年生/中学3年生=1, それ以外の学年=0
一週間通塾日数	一週間のうち塾に通っている日数
親から本を読んでもらったダミー	小さい頃に「親に本を読んでもらった」に対して、クロス集計では、「たくさんあった」「ときどきあった」を「あった」とし、「あまりなかった」「ほとんどなかった」を「なかった」とする。ロジスティック回帰分析では、「あった」=1, 「なかった」=0 とする。
親が勉強を教えるダミー	親との関係で「勉強を教えてくれる」という項目に対して、クロス集計では、選択された場合を「ある」、選択されなかった場合を「ない」とする。ロジスティック回帰分析では、「ある」=1, 「ない」=0 とする。
親は悪いことを叱るダミー	親との関係で「悪いことをしたときにしかってくれる」という項目に対して、クロス集計では、選択された場合を「ある」、選択されなかった場合を「ない」とする。ロジスティック回帰分析では、「ある」=1, 「ない」=0 とする。
無駄づかいをしないダミー	お金を「むだづかいしないようにしている」に対して、「とてもそう」「まあそう」=1, 「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」=0 とする。
自分のことは自分でするダミー	「自分のことは、できるだけ自分でするようにしている」に対して、「とてもそう」「まあそう」=1, 「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」=0 とする。
決まりやルールを守るダミー	「きまりやルールをきちんと守るほうだ」に対して、「とてもそう」「まあそう」=1, 「あまりそうでない」「ぜんぜんそうでない」=0 とする。

表 2 使用する変数の記述統計量

	学校段階	有効度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
おこづかい額（千円単位）	小学生	3731	0.000	20.000	0.965	1.268
	中学生	3811	0.000	80.000	2.287	3.010
女子ダミー	小学生	4234	0.000	1.000	0.487	0.500
	中学生	4532	0.000	1.000	0.497	0.500
大都市ダミー	小学生	4240	0.000	1.000	0.344	0.475
	中学生	4550	0.000	1.000	0.329	0.470
中都市ダミー	小学生	4240	0.000	1.000	0.352	0.478
	中学生	4550	0.000	1.000	0.320	0.467
小5／中2ダミー	小学生	4240	0.000	1.000	0.330	0.470
	中学生	4550	0.000	1.000	0.309	0.462
小6／中3ダミー	小学生	4240	0.000	1.000	0.318	0.466
	中学生	4550	0.000	1.000	0.357	0.479
一週間通塾日数	小学生	4173	0.000	7.000	0.598	1.246
	中学生	4516	0.000	7.000	1.158	1.435
親から本を読んでもらったダミー	小学生	4195	0.000	1.000	0.570	0.495
	中学生	4519	0.000	1.000	0.533	0.499
親が勉強を教えてくれるダミー	小学生	4240	0.000	1.000	0.721	0.449
	中学生	4550	0.000	1.000	0.354	0.478
親は悪いことを叱るダミー	小学生	4240	0.000	1.000	0.834	0.372
	中学生	4550	0.000	1.000	0.688	0.463
無駄づかいをしないダミー	小学生	4132	0.000	1.000	0.802	0.399
	中学生	4467	0.000	1.000	0.756	0.430
自分のことは自分でするダミー	小学生	4174	0.000	1.000	0.858	0.349
	中学生	4501	0.000	1.000	0.849	0.358
決まりやルールを守るダミー	小学生	4161	0.000	1.000	0.664	0.472
	中学生	4497	0.000	1.000	0.707	0.455

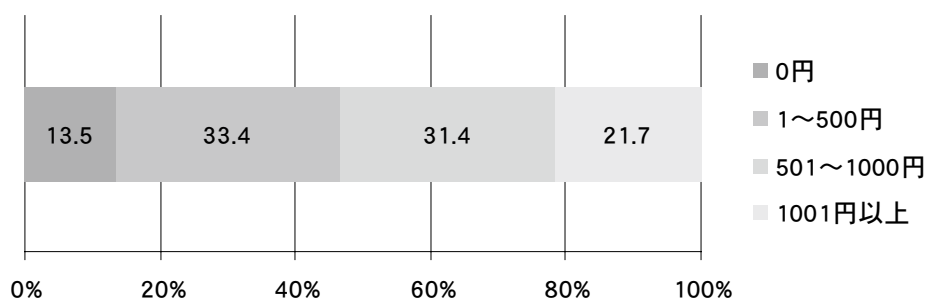


図 1 小学生のおこづかい額の分布

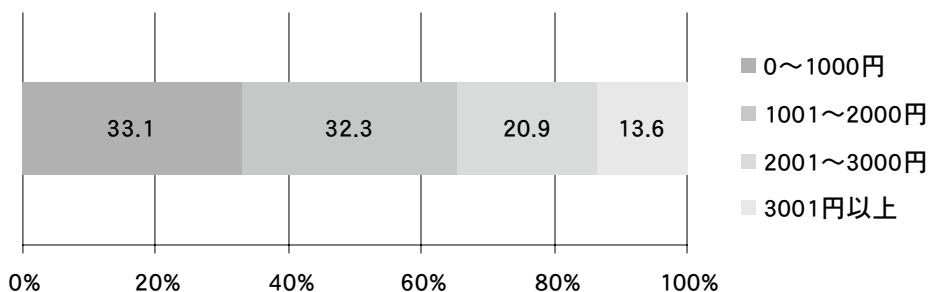


図 2 中学生のおこづかい額の分布

表 3 性別×おこづかい額（小学生）

性別	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0円	1～500円	501～1000円	1001円以上		
男子	14.4%	33.2%	29.7%	22.6%	100.0%	1943
女子	12.5%	33.5%	33.4%	20.7%	100.0%	1783
合計	13.5%	33.4%	31.5%	21.7%	100.0%	3726

5%水準で有意 p=0.044

表 4 学年×おこづかい額（小学生）

学年	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0円	1～500円	501～1000円	1001円以上		
小学4年生	17.3%	44.0%	23.8%	14.9%	100.0%	1310
小学5年生	11.9%	37.3%	31.3%	19.5%	100.0%	1236
小学6年生	11.0%	17.5%	40.0%	31.6%	100.0%	1185
合計	13.5%	33.4%	31.4%	21.7%	100.0%	3731

0.1%水準で有意 p=0.000

表 5 親から本を読んでもらった×おこづかい額（小学生）

親から本を 読んでもらった	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0円	1～500円	501～1000円	1001円以上		
あった	13.9%	35.5%	31.4%	19.3%	100.0%	2093
なかった	12.9%	30.5%	31.7%	24.9%	100.0%	1598
合計	13.4%	33.3%	31.5%	21.7%	100.0%	3691

0.1%水準で有意 p=0.000

表 6 親が勉強を教えてくれる×おこづかい額（小学生）

親が勉強を 教えてくれる	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0円	1～500円	501～1000円	1001円以上		
ある	13.6%	34.8%	31.9%	19.7%	100.0%	2718
ない	13.0%	29.6%	30.3%	27.0%	100.0%	1013
合計	13.5%	33.4%	31.4%	21.7%	100.0%	3731

0.1%水準で有意 p=0.000

表 7 親は悪いことを叱る×おこづかい額（小学生）

親は 悪いことを叱る	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0円	1～500円	501～1000円	1001円以上		
ある	13.7%	33.9%	31.2%	21.2%	100.0%	3139
ない	12.3%	30.4%	32.9%	24.3%	100.0%	592
合計	13.5%	33.4%	31.4%	21.7%	100.0%	3731

有意差なし p=0.154

表9より、中学生も小学生と同様に学年にしたがって金額が上昇している。家庭の教育方針については、表10では統計的に有意な関連が見出せなかったが、表11と表12では、小学生のときと同様の関連がみられた。つまり、教育熱心でしつけを重視する家庭のほうが、子どものおこづかい額をやや低く設定している傾向にある³⁾。

C. おこづかいが小中学生に与える影響

以下では、本稿の2つ目の課題である「おこづかいが小中学生に及ぼす影響」を明らかにする。はじめに、おこづかい額と金銭感覚の関連を検討する。表13と表

14は、それぞれ小学生と中学生を対象として、「(お金を)むだづかいをしないようにしている」に従属変数とするロジスティック回帰分析をおこなった結果である。擬似相関を防ぐため、地域・通塾日数・家庭の教育方針なども独立変数に投入している。モデル1の分析結果から、小学生も中学生も、おこづかいが少ないほど、無駄づかいをしない傾向にあることがわかる。これはある意味で当然の結果である。金額が少なければ、好むと好まざるとにかかわらず儉約せざるを得ないということだと解釈できる。

ただし、中学生を対象とする表14のモデル2をみると、おこづかい額が有意でなく(回帰係数は-0.014)、

表 8 性別×おこづかい額（中学生）

性別	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0～1000円	1001～2000円	2001～3000円	3001円以上		
男子	36.0%	32.3%	18.5%	13.2%	100.0%	1945
女子	30.1%	32.3%	23.5%	14.1%	100.0%	1849
合計	33.2%	32.3%	20.9%	13.6%	100.0%	3794

0.1%水準で有意 p=0.000

表 9 学年×おこづかい額（中学生）

学年	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0～1000円	1001～2000円	2001～3000円	3001円以上		
中学1年生	47.4%	30.4%	13.7%	8.6%	100.0%	1284
中学2年生	30.8%	39.0%	18.6%	11.7%	100.0%	1137
中学3年生	21.8%	28.7%	29.6%	19.9%	100.0%	1390
合計	33.1%	32.3%	20.9%	13.6%	100.0%	3811

0.1%水準で有意 p=0.000

表10 親から本を読んでもらった×おこづかい額（中学生）

親から本を読んでもらった	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0～1000円	1001～2000円	2001～3000円	3001円以上		
あった	33.5%	33.1%	20.3%	13.2%	100.0%	2007
なかった	32.7%	31.4%	21.8%	14.2%	100.0%	1783
合計	33.1%	32.3%	21.0%	13.6%	100.0%	3790

有意差なし p=0.426

表11 親が勉強を教えてくれる×おこづかい額（中学生）

親が勉強を 教えてくれる	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0～1000円	1001～2000円	2001～3000円	3001円以上		
ある	40.2%	33.3%	17.1%	9.4%	100.0%	1392
ない	29.0%	31.8%	23.2%	16.1%	100.0%	2419
合計	33.1%	32.3%	20.9%	13.6%	100.0%	3811

0.1%水準で有意 p=0.000

表12 親は悪いことを叱る×おこづかい額（中学生）

親は 悪いことを叱る	月あたりのおこづかい額				合計	N
	0～1000円	1001～2000円	2001～3000円	3001円以上		
ある	34.3%	32.8%	20.3%	12.6%	100.0%	2737
ない	30.1%	31.1%	22.5%	16.3%	100.0%	1074
合計	33.1%	32.3%	20.9%	13.6%	100.0%	3811

1%水準で有意 p=0.003

「親から本を読んでもらった」と「おこづかい額」の交互作用項が負に有意（回帰係数は-0.142）となっている。これはつまり、中学生に関して、親から本を読んでもらっていないような家庭の子どもでは、おこづかい額とむだづかいは関係せず（-0.014）、親から本を読んでもらったような家庭の子どもでは、おこづかい額が少ないほど、無駄づかいをしない傾向があることを示している（-0.014-0.142=-0.156）。換言すれば、親が本を読み聞かせをするというような教育的関与に積極的ではないような家庭の子どもは、おこづかい額が少なくても、節約しようとししない傾向がある。

次に、おこづかい額が自己管理能力に与える影響を

分析する。表15と表16は「自分のことは、できるだけ自分でするようにしている」を従属変数とするロジスティック回帰分析をおこなった結果である。モデル1の分析結果から、小中学生ともに、おこづかい額と自分のことは自分でするという意識との関連はみられなかった。モデル2でも、交互作用項はすべて有意ではなく、回帰係数も小さい。おこづかい額の多寡は、自分のことは自分でするという意識を高めることも低めることもないことがわかる。

表17と表18は、同じく自己管理能力である「きまりやルールをきちんと守るほうだ」を従属変数とするロジスティック回帰分析を、小学生と中学生のそれぞれ

表13 「無駄づかいをしない」の規定要因（ロジスティック回帰分析）（小学生）

	モデル 1			モデル 2		
	回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
女子ダミー	0.252	1.287	**	0.256	1.292	***
大都市ダミー	0.252	1.286	*	0.252	1.287	*
中都市ダミー	0.153	1.165		0.160	1.173	
小 5 ダミー	-0.020	0.980		-0.020	0.980	
小 6 ダミー	-0.143	0.867		-0.147	0.863	
一週間通塾日数	0.033	1.034		0.034	1.034	
親から本を読んでもらったダミー	0.310	1.363	***	0.420	1.522	***
親が勉強を教えてくれるダミー	0.315	1.370	***	0.190	1.210	
親は悪いことを叱るダミー	0.185	1.203		0.234	1.264	
おこづかい額（千円単位）	-0.117	0.889	***	-0.092	0.912	
親から本を読んでもらった×おこづかい額				-0.109	0.897	
親が勉強を教えてくれる×おこづかい額				0.117	1.124	
親は悪いことを叱る×おこづかい額				-0.049	0.952	
（定数）	0.758	2.135	***	0.736	2.088	***
Nagelkerke決定係数	0.037			0.039		
尤度比のカイ二乗検定	p=0.000			p=0.000		
N	3591			3591		

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001

表14 「無駄づかいをしない」の規定要因（ロジスティック回帰分析）（中学生）

	モデル 1			モデル 2		
	回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
女子ダミー	-0.049	0.952		-0.049	0.952	
大都市ダミー	-0.161	0.851		-0.157	0.855	
中都市ダミー	0.019	1.019		0.022	1.022	
中 2 ダミー	-0.038	0.963		-0.040	0.961	
中 3 ダミー	-0.093	0.912		-0.081	0.922	
一週間通塾日数	0.020	1.021		0.025	1.026	
親から本を読んでもらったダミー	0.235	1.264	**	0.564	1.758	***
親が勉強を教えてくれるダミー	0.366	1.442	***	0.351	1.421	**
親は悪いことを叱るダミー	0.197	1.217	*	0.107	1.112	
おこづかい額（千円単位）	-0.035	0.966	**	-0.014	0.986	
親から本を読んでもらった×おこづかい額				-0.142	0.867	***
親が勉強を教えてくれる×おこづかい額				0.006	1.006	
親は悪いことを叱る×おこづかい額				0.042	1.043	
（定数）	0.903	2.466	***	0.840	2.317	***
Nagelkerke決定係数	0.025			0.033		
尤度比のカイ二乗検定	p=0.000			p=0.000		
N	3707			3707		

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001

についておこなった結果である。モデル 1 の分析結果から、中学生についてのみ、おこづかいが多いほど、決まりやルールを守らない傾向があることがわかる。おこづかいが少ないと、それを計画的に運用することが求められ、決まりやルールに則った行動をとりやすくなるのかもしれない。

ただし、中学生を対象とする表18のモデル 2 をみると、おこづかい額が負に有意（回帰係数は-0.076）であり、「親は悪いことを叱る」と「おこづかい額」の交互作用項が正に有意（回帰係数は0.066）となっている。つまり、親が悪いことを叱るような家庭の子ど

もでは、おこづかい額と決まりやルールを守るかどうかは関係しないが（ $-0.076+0.066=-0.010$ ）、親が悪いことを叱らないような家庭の子どもでは、おこづかい額が多いほど、決まりやルールを守らない傾向がある（-0.076）。換言すれば、しつづけを重視する家庭の子どもにとっては、おこづかい額は決まりやルールを守るかどうかに影響しないが、しつづけを重視していない家庭の子どもに限って、多いおこづかいが決まりやルールを守って行動しないことにつながる可能性がある。

表15 「自分のことは自分です」の規定要因（ロジスティック回帰分析）（小学生）

	モデル 1		モデル 2	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
女子ダミー	0.169	1.184	0.161	1.174
大都市ダミー	0.089	1.094	0.092	1.096
中都市ダミー	0.072	1.075	0.071	1.073
小 5 ダミー	0.152	1.164	0.146	1.157
小 6 ダミー	0.309	1.362	0.309	1.362
一週間通塾日数	0.061	1.063	0.062	1.064
親から本を読んでもらったダミー	0.331	1.392	0.441	1.555
親が勉強を教えてくれるダミー	0.402	1.495	0.513	1.670
親は悪いことを叱るダミー	0.388	1.474	0.347	1.415
おこづかい額（千円単位）	0.038	1.039	0.139	1.149
親から本を読んでもらった×おこづかい額			-0.115	0.891
親が勉強を教えてくれる×おこづかい額			-0.111	0.895
親は悪いことを叱る×おこづかい額			0.041	1.042
（定数）	0.700	2.013	0.603	1.828
Nagelkerke決定係数	0.032		0.034	
尤度比のカイ二乗検定	p=0.000		p=0.000	
N	3618		3618	

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001

表16 「自分のことは自分です」の規定要因（ロジスティック回帰分析）（中学生）

	モデル 1		モデル 2	
	回帰係数	オッズ比	回帰係数	オッズ比
女子ダミー	-0.099	0.906	-0.101	0.904
大都市ダミー	-0.192	0.825	-0.195	0.823
中都市ダミー	-0.148	0.862	-0.148	0.862
中 2 ダミー	0.059	1.060	0.055	1.057
中 3 ダミー	0.208	1.231	0.206	1.229
一週間通塾日数	-0.021	0.979	-0.019	0.981
親から本を読んでもらったダミー	0.092	1.096	0.200	1.221
親が勉強を教えてくれるダミー	0.147	1.158	0.138	1.148
親は悪いことを叱るダミー	0.309	1.362	0.244	1.276
おこづかい額（千円単位）	-0.002	0.998	0.003	1.003
親から本を読んでもらった×おこづかい額			-0.049	0.952
親が勉強を教えてくれる×おこづかい額			0.004	1.004
親は悪いことを叱る×おこづかい額			0.030	1.030
（定数）	1.542	4.676	1.533	4.633
Nagelkerke決定係数	0.009		0.010	
尤度比のカイ二乗検定	p=0.029		p=0.060	
N	3713		3713	

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001

5. 結論と考察

本稿では、小中学生のおこづかいの金額の規定要因と、おこづかいが小中学生に与える影響について検証をおこなってきた。そこで明らかになったことは、大きく分けて以下の3つである。

第1に、おこづかい額に家庭の教育方針が影響を及ぼしていることがわかった。教育熱心でしつづけを重視する家庭ほど、おこづかいの金額を低く設定しており、教育戦略の1つとして、意図的におこづかいの金額設定を抑えていることが考えられる。

第2に、おこづかい額が少ないことが子どもの儉約意識を高めることが確かめられた。この関係自体は自明のことであるが、むしろ注目すべきは、この関係が幼少時に親に本を読んでもらったことがないような家庭の中学生ではみられなくなるということである。幼少時に本を読んでもらっていない家庭を、教育戦略にそれほど積極的ではない家庭であると仮定すれば、そのような家庭の中学生は、消費文化への傾倒が大きく、儉約的な志向が根づきにくいかもしれない。

第3に、おこづかい額は、自分のことは自分ですというタイプの自己管理能力とは関連しなかったが、

表17 「決まりやルールを守る」の規定要因（ロジスティック回帰分析）（小学生）

	モデル 1			モデル 2		
	回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
女子ダミー	0.446	1.562	***	0.450	1.568	***
大都市ダミー	-0.045	0.956		-0.048	0.953	
中都市ダミー	0.088	1.091		0.089	1.093	
小 5 ダミー	-0.058	0.943		-0.056	0.946	
小 6 ダミー	-0.263	0.769	**	-0.263	0.769	**
一週間通塾日数	0.005	1.005		0.004	1.004	
親から本を読んでもらったダミー	0.313	1.368	***	0.308	1.361	**
親が勉強を教えてくれるダミー	0.459	1.583	***	0.383	1.467	***
親は悪いことを叱るダミー	0.155	1.168		0.250	1.284	*
おこづかい額（千円単位）	-0.041	0.960		-0.019	0.981	
親から本を読んでもらった×おこづかい額				0.000	1.000	
親が勉強を教えてくれる×おこづかい額				0.073	1.076	
親は悪いことを叱る×おこづかい額				-0.091	0.913	
（定数）	-0.038	0.962		-0.060	0.942	
Nagelkerke決定係数	0.057			0.058		
尤度比のカイ二乗検定	p=0.000			p=0.000		
N	3613			3613		

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001

表18 「決まりやルールを守る」の規定要因（ロジスティック回帰分析）（中学生）

	モデル 1			モデル 2		
	回帰係数	オッズ比		回帰係数	オッズ比	
女子ダミー	0.200	1.221	**	0.202	1.224	**
大都市ダミー	-0.273	0.761	**	-0.272	0.762	**
中都市ダミー	0.125	1.133		0.129	1.137	
中 2 ダミー	0.281	1.325	**	0.278	1.320	**
中 3 ダミー	0.577	1.781	***	0.585	1.795	***
一週間通塾日数	0.037	1.038		0.036	1.037	
親から本を読んでもらったダミー	0.378	1.460	***	0.390	1.477	***
親が勉強を教えてくれるダミー	0.425	1.529	***	0.426	1.531	***
親は悪いことを叱るダミー	0.225	1.252	**	0.068	1.071	
おこづかい額（千円単位）	-0.032	0.969	*	-0.076	0.926	**
親から本を読んでもらった×おこづかい額				-0.008	0.992	
親が勉強を教えてくれる×おこづかい額				0.000	1.000	
親は悪いことを叱る×おこづかい額				0.066	1.068	*
（定数）	0.112	1.118		0.221	1.247	
Nagelkerke決定係数	0.057			0.059		
尤度比のカイ二乗検定	p=0.000			p=0.000		
N	3709			3709		

* : p<0.05, ** : p<0.01, *** : p<0.001

決まりやルールを守るというタイプの自己管理能力とは、中学生のみで関連がみられた。すなわち、おこづかい額が多い中学生ほど、決まりやルールを守らない傾向がある。さらに、この傾向は親が悪いことを叱るような家庭の子どもではみられず、親が悪いことを叱らないような家庭の子どものみでみられる。しつけを重視していない家庭では、もともと決まりやルールを守らせるための指導が十分におこなわれておらず、そのような家庭で子どもに多額のおこづかいが付与される場合、決まりやルールを順守しない放埒な意識につながる可能性があるのではなからうか。

以上のことから、本稿の分析を通して、家庭の教育戦略の一要素としてのおこづかいがみえてくる。おこづかい額は性別や学年のみで決まるものではなく、家庭の教育方針によっても規定される。さらに、おこづかいの効果に対しても、おこづかいと家庭の教育方針との交互作用がある。つまり、おこづかいが子どもに与える効果は、おこづかい以外の家庭教育のあり方によって異なる。

分析結果全体としては、おこづかいの効果はあくまで限定的であり、自分のことは自分ですというタイプの自己管理能力には効果を及ぼさず、金銭感覚に対

する効果もそれほど大きくはない。おこづかい額を抑制することの効果は否定しないが、教育雑誌で取り沙汰されているようなおこづかいの多面的な効果は、本分析では明確にあらわれてはいない。つまり、おこづかいとは家庭の教育戦略のごく部分的な一要素であるにすぎず、おこづかい単独で議論すること、たとえばその金額設定のみに着目するような議論にはあまり意味がないといえる。おこづかいが子どもにとっていかなる意味や影響をもつかは、より広い家庭の教育戦略全体という文脈によって左右されるのである。

本稿の分析では、どのような家庭の子どもにおこづかいの効果があるかという検証にとどまっており、詳細なメカニズムの検証に踏み入ってはいない。しかし、これまでの家庭の教育戦略の研究は、おこづかいにほとんど着目してこなかったことに加えて、おこづかいと家庭の教育方針との交互作用に着目しておらず、おこづかいをそれ単独のものとして分析する傾向があった。本稿は、このような従来の研究のあり方に対して、一石を投じることができたと考えることもできる。

なお本稿では、教育戦略と切り離せない関係にある社会階層やジェンダーなどの親の属性変数との関係や、おこづかいが影響をもたらす可能性のある他の従属変数に触れられなかったという限界がある。本稿で得られた知見をもとに、おこづかいの意味や効果に関する研究がより蓄積されることを期待したい。

謝辞

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJデータアーカイブから「第1回子ども生活実態基本調査（ベネッセコーポレーション）」の個票データの提供を受けました。ここに感謝の意を表します。

注

- 1) 本稿で用いるベネッセコーポレーションの「子ども生活実態基本調査」のほかに、金融広報中央委員会は、「家計の金融行動に関する世論調査〔二人以上世帯調査〕」において、小学生・中学生・高校生・大学生のおこづかい額を数値を書き込む形式で尋ねている。また、無作為抽出による妥当性・信頼性の高い全国調査という前提を外せば、Web上を中心に多くの調査がなされている。
- 2) なお、おこづかい額を従属変数、女子ダミー・小5ダミー・小6ダミー・親から本を読んでもらったダミー・親が勉強を教えたダミー・親は悪いことを叱るダミーを独立変数としたトビット回帰分析（従属変数打ち切り値を0に設定）をおこなった

ところ、親は悪いことを叱るダミーを除くすべての独立変数は、おこづかい額に対して5%水準で有意な効果を及ぼしていた。このことから、互いの変数の効果を統制しても、クロス集計で得られた知見が支持されることがわかる。

- 3) なお、おこづかい額を従属変数、女子ダミー・中2ダミー・中3ダミー・親から本を読んでもらったダミー・親が勉強を教えたダミー・親は悪いことを叱るダミーを独立変数としたトビット回帰分析（従属変数打ち切り値を0に設定）をおこなったところ、すべての独立変数は、おこづかい額に対して5%水準で有意な効果を及ぼしていた。このことから、互いの変数の効果を統制しても、クロス集計で得られた知見が支持されることがわかる。

引用文献

- Abramovitch, Rona, Jonathan L. Freedman and Patricia Pliner, 1991, "Children and money: Getting and allowance, credit versus cash, and knowledge of pricing" *Journal of Economic Psychology*, 12: 27-45.
- Benesse教育研究開発センター, 2005, 『第1回子ども生活実態基本調査報告書——小学生・中学生・高校生を対象に』ベネッセコーポレーション.
- Furnham, Adrian, 1999, "Economic socialization: A study of adults' perceptions and uses of allowances (pocket money) to educate children" *British Journal of Developmental Psychology*, 17: 585-604.
- 本田由紀, 2008, 『家庭教育の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房.
- 奥村美代子・宮瀬美津子・岩下紀子・袖木美保・岡部由紀子, 1989, 「児童・生徒の発達段階から見た消費者教育(第1報)——金銭の側面からみた検討」『熊本大学教育実践研究』第6巻, pp.83-96.
- Ridge, Tess, 2002, "Childhood Poverty and Social Exclusion: From a Child Perspective" *The Policy Press*. (=中村好孝・松田洋介・渡辺雅男訳, 2010, 『子どもの貧困と社会的排除』桜井書店.)
- 竹尾和子・片成男・高橋登・サトウタツヤ・山本登志哉・呉宣児・金順子・崔順子, 2004, 「お金のやりとりから見た子どもの親子関係と友だち関係——大阪調査から」『発達研究』第18巻, pp.1-13.
- 田結庄順子・柳昌子・吉原崇恵・中屋紀子・牧野カツコ, 1992, 「児童・生徒・大学生の消費実態と学校における消費者教育の今後の課題に関する研究(第1報)——研究枠組と基本的属性および児童・生徒の場合」『日本家政学会誌』第43巻8号, pp.813-25.
- 竹尾和子・高橋登・山本登志哉・サトウタツヤ・片成男・呉宣児, 2009, 「お金の文化的媒介機能から捉えた親子関係の発達の变化」『発達心理学研究』第20巻4号, pp.406-18.
- 山本登志哉, 1992, 「小学生とお小遣い——『お金』・『物霊』・『僕のもの』」『発達』51号, pp.68-76.

(指導教員 本田由紀教授)